歴史の足跡

北海道医学教育史年表(1)

札幌市医師会　小竹英夫

北海道の医学教育に関する年表を編んだので、以下数号にわたり連載することとする。

医学教育の外に、当時の時勢を知るよすがとして、多少の政治・経済に関する事項を採録した。

明治5年12月3日、新暦採用以前の月日は、陰暦であることにご注意ありたい。

陰暦は1カ月の日数が、大の月は30日、小の月は29日、1年は354日である。33カ月毎に閏(うるう)月を設け、この年は1年13カ月である。

月日が未確定のものは、年の終りにこの年・この頃などと表示したが、表示してない場合もある。

天正18年（1590）

12.29　蠣崎慶広(かきざきよしひろ)上洛して、聚楽第において豊臣秀吉に拝謁。

文禄2年（1593）

1．2　慶広、朝鮮侵攻のため名護屋（現佐賀県）に滞陣中の秀吉に拝謁、蝦夷島の支配者として公認される。

慶長4年（1599）

11．7　慶広、大坂城にて徳川家康に拝謁。この時、姓を蠣崎から松前と改める。

慶長11年（1606）秋、新城福山館が落成。それまでの居城大館から移る。

慶広は、秀吉の天下統一事業が進むとみると、いち早く秀吉に近づき、さらに豊臣政権が家康に移るとこれに近づき、蝦夷地での実権を認めさせ、以後明治維新の第18代藩主松前徳広に至るまでほぼ260年間政権を維持した。

ただしこの間、2回にわたり上知を命ぜられ、蝦夷地は幕府の直轄となり、陸奥国伊達郡梁川に移封される。

現松前城は、嘉永2年（1849）幕府が北辺防備のため、特旨を以て松前氏を城主大名に格上げし、松前に築城を命じたことにより造営されたもの。明治初年、一部を残し、取り壊された。

嘉永6年（1853）

この年、松前藩、済衆館（医学館）を福山川原町に設立。ただし、済衆館は医育機関ではなく、研修機関であった。

松前藩医として最初に仕えたのは、櫻井氏であるらしく、蠣崎慶広が天正18年（1590）上洛して豊臣秀吉に謁したとき、これに随行した4世玄三が、京都に留って医術を学んだのが、松前に医のある初めであると『櫻井氏家譜』に記されている。

櫻井家で最も知られているのは櫻井小膳で、松前の専念寺の墓表にその人となりが刻まれている。

櫻井家には小膳の系統と、櫻井励の系統があるようである。

櫻井氏のほかに村岡氏も知られているが、その他にも、宇佐美氏、今井氏、牧村氏、吉田氏、滝沢氏、加藤氏らの藩医がいたようだ。

万延元年（1860）

箱館の医師の要請により、箱館奉行組頭・栗本鯤（号は匏庵、鋤雲は別号で、晩年の通称）と塩田順庵は、医学所の設立をはかり、翌年竣工。

文久元年（1861）

箱館奉行所、箱館山の上新町に医学所兼病院を建て、下山仙庵、田堂春堂、深瀬洋春、永井玄栄、柏倉忠粛の5名を挙げて頭取とし、市中の諸医に講義の聴聞を許し、かつ貧民の救療所たらしめる。

明治元年（1868）

10.20　幕府脱走榎本軍、鷲の木に上陸。

12.15　旧幕府軍、五稜郭に拠り、全島平定を祝し祝砲を発し、総裁以下役職を公選。

明治2年（1869）

5.18　五稜郭にある武揚以下、政府軍に降る。

幕府脱走軍に従った元幕府奥医師・高松凌雲は箱館病院頭取に任じ、病院規則を制定、フランスで学んだ赤十字精神に則り、敵味方の傷病者を平等に治療する。

7.8　開拓使を設置。

8.15　蝦夷地を北海道と改称し、11国86郡と定める。

9.一　箱館を改めて函館とする。

11.一　札幌村に仮病院を設ける（現市立病院の初め）。

明治3年（1870）

2.13　樺太開拓史を置く。

閏10.9　東京開拓使本庁を廃し、函館出張所を本庁とする。

明治4年（1871）

5.一　札幌に開拓使本庁を置く。

7.7　スチュアート・エルドリッジ、開拓使顧問ケプロンの書記兼医師として来日。

8.8　樺太開拓使を廃し、北海道開拓使に合併。

10.10　エルドリッジの通訳・章　克己、開拓使等外一等附属拝命（18歳）。

12.5　のちに函館医学校生徒となる石崎鼎吾、軍医総監・松本　順の営む蘭畴舎に入塾。

明治5年（1872）

1.23　黒田開拓次官、病院および医学校取建、外人医師の招聘を正院に届出。

これに対し、正院は「医学校取建之儀伺之通」と許可を与え、「医師雇入其他規則等伺之上施行可致事」とした。

この医学校取建は、その建設の地がどこか極めて漠たるものであるが、『開拓使事業報告』第四編衛生の部の総説に、「医学を函館札幌両所に興し」とあるから、最初から2校の開校が目論まれていたのかもしれない。

3.14　開拓使仮学校を東京芝増上寺内に置く（開拓使東京出張所内）。

3.15　エルドリッジの通訳・本多公敏、開拓使14等出仕申付（20歳）。

4.15　開拓使仮学校開校（校長・荒井郁之助）。「此学校ノ儀ハ北海道之為メニ設クルヲ以テ、是レヲ彼地ノ首府タル札幌ニ建テ、彼地ニ住スル者ヲシテ専ラ知識ヲ増シ、方芸ヲ進メ是レヲ以テ開拓ノ資業トナサシメントノ本旨タリ。然レドモ其業日浅ク、事ニ就リ序有リテ、彼地ニ学校ヲ建ルノ暇アラザルヲ以テ、先ヅ仮学校ヲ東京ニ設ク云々」（開拓使仮学校規則第一条）。

4.一　章　克己、エルドリッジ、ワッソン（開拓使道路測量主任）函館行きにつき随行（このとき本多公敏も同行？）。

5.7　石崎鼎吾、開拓使官費医学生拝命。

5.20　エルドリッジ、ケプロンの指令により、開拓使外科医長の職につき函館に赴き、次いで札幌へ出張。病院の具備すべき要件を建言し、併せて生徒教授の際の注意におよぶ。

8.一　開拓使函館医学校開校。開校の時季は明らかでないが、官費生徒石崎鼎吾の講義ノートによれば、この8月に、エルドリッジによって、産科および婦病論が講ぜられているから、開校は確かである。

エルドリッジ雇傭満期の明治7年11月末で、この学校は閉校かと思われるが、各種の記録によると、9年末まで教育が続けられていた模様である。

9.4　エルドリッジ、医学書の輸入を申請。この書物は開拓使書籍掛により東京築地のハアレン書肆に注文され、その代価は合計967円25銭であった。

開拓使、資生館、開墾懸に、開拓使医学校生徒（札幌）の人撰を依頼（11月20日迄の期限付）。